

報道関係機関と地球研との懇談会

2017年 1月19日(木) 14:00~15:00
 京都烏丸コンベンションホール 会議室1

〒604-8162 京都市中京区烏丸通六角下る七観音町634 TEL. 075-231-6351

1 開会挨拶

くぼた じゅんぺい
 窪田 順平 副所長

2 講演会・セミナーなどのお知らせ

とよやま まり
 説明：遠山 真理 サイエンスコミュニケーター

世界農業遺産 高千穂町シンポジウム 第18回地球研地域連携セミナー

世界農業遺産「変えなければならないものと、変えてはならないもの」

2017年1月21日(土) 13:00~16:30

高千穂町自然休養村管理センター

講師：阿部健一（地球研 教授）

林 浩昭（国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会 会長）

地球研地域連携セミナーは、世界や日本の各地域で共通する地球環境問題の根底を探り、解決のための方法を考えていくことを目的に、地元の大学や研究機関、行政機関などと連携して開催するセミナーです。第18回となる今回は、宮崎県高千穂町にて世界農業遺産をテーマに、地域社会・行政・次世代（高校生）の参画を得て、地域として何を変えなければならないのか、何を大切に残すべきなのか、論議したいと考えています。



第69回地球研市民セミナー 「生物多様性の問題を社会に根づかせる」

2016年1月24日(火) 18:30~20:00

京都教育文化センターホール

講師：中静 透（地球研 特任教授）

聞き手：王 智弘（地球研 プロジェクト研究員）

地球研市民セミナーは、地球研の研究成果や地球環境問題の動向をわかりやすく



一般の方に紹介することを目的に、地球研または京都市内の会場において開催しています。

今回は生物多様性に関する様々な動きに着目します。生物多様性と社会のつながりを考えるうえで、生態系が人類にもたらす恵み（生態系サービス）の評価が可能になってきました。物多様性問題を社会の中に根付かせる（主流化する）最近の動向を考えてみたいと思います。

第8回地球研東京セミナー 「地球の想像力 人新世時代（Anthropocene）の学び」

2017年1月26日（木）10:00～17:00

東京・東京大学本郷キャンパス 福武ホール

講師：高野 孝子（早稲田大学 教授）

梶谷 真司（東京大学大学院 教授）

近藤 康久（地球研 准教授）



地球研の成果と今後のさらなる進展について、国内の研究者コミュニティや一般の方に理解と協力をよびかけていくため、東京でのセミナーを開催しています。第8回となる今回は、欧米の人文・社会科学で注目を集めている

「人新世」という言葉に焦点をあてます。「人新世」(Anthropocene)とは、人口増大、森林伐採、生物多様性の減少、人為的な気候変動など、人間とその活動が地球の地質にまで影響を与える、あらたな地質学的時代に入ったという主張です。この「人新世」の時代に、われわれは何をすべきなのでしょう。すでに、地球環境問題に関する情報や知識は十分すぎるほどあります。課題は、情報や知識を社会変革のための行動へと移すための「学習」です。一人一人の日常生活が地球の地質時代区分にまで影響を与える、ということを理解する想像力が、いま必要とされています。本シンポジウムでは、こうした想像力をどのようにして養うのか、あらたな「教育」のあり方を議論します。

第8回 KYOTO 地球環境の殿堂 表彰式および スペシャルセッション

2017年2月11日（土・祝）13:00～14:15

『KYOTO 地球環境の殿堂』表彰式

国立京都国際会館 メインホール

第8回殿堂入り者

○オギュスタン・ベルク（フランス国立社会科学高等研究院 教授）

○ホセ・アルベルト・ムヒカ・コルダノ（前ウルグアイ大統領） 来日調整中

○中村 哲（医師、ペシャワール会 現地代表、

PMS（ピース・ジャパン・メディカル・サービス） 総院長）



2017年2月11日（土・祝）14:30～17:00

京都環境文化学術フォーラム 国際シンポジウム

国立京都国際会館 メインホール

パネリスト：殿堂入り者

山極 壽一（京都大学 総長）

眞鍋 かをり（タレント）

「京都議定書」誕生の地である京都の名のもとに、世界で地球環境の保全に多大な貢献をした実務家、研究者などの顕彰を行ないます。その功績を永く後世に引き継ぎ、京都から世界に向けて広く発信することにより、地球環境問題の解決に向けたあらゆる国、地域、人々の意志の共有と取り組みの推進に資することを目的としています。本顕彰は、「KYOTO 地球環境の殿堂」運営協議会（京都府・京都市・京都商工会議所・環境省・国立京都国際会館・地球研）が中心となり、環境分野の専門家、学識者、活動家などで構成する選考委員会で選考されます。

【殿堂入り者の紹介（京都府 HP より公式の情報）】

オギュスタン・ベルク（Augustin Berque）1942 年生 フランス

フランス国立社会科学高等研究院 教授。モロッコ・ラバト生まれ。
パリ大学にて、地理学と中国語を学び、1969年に地理学の博士号、1977年にはパリ第4大学で文学の博士号を取得する。地理学者、東洋学者として、1979年よりフランス社会科学高等研究院教授を務めている。1969年に初来日して以来、北海道大学講師、東北大学客員研究員、日仏会館フランス学長、宮城大学教授、国際日本文化研究センター客員研究員などとして、通算17年以上滞在し、日本の文化や風土への造詣を深め、フランスにおける日本理解に大きく貢献している。

ホセ・アルベルト・ムヒカ・コルダノ（José Alberto Mujica Cordano）1935 年生 ウルグアイ

ウルグアイの前大統領（2010年3月1日より2015年2月末まで）。
大統領時代の月給の9割を慈善団体に寄附し、その質素な暮らしから「世界で最も貧しい（質素な）大統領」として知られている。
2012年ブラジルのリオデジャネイロで開かれた「国連持続可能な開発会議」（リオ+20）において、貧富の格差が広がり貧困が大きな問題となっている現代のグローバリズム、消費主義社会、物質主義社会に対して疑問を呈し、我々自身の生活スタイルを見直すべきだとしたスピーチにより、世界から注目を浴びる。

中村 哲（Nakamura Tetsu）1946 年生 日本

医師、ペシャワール会 現地代表、PMS（ピース・ジャパン・メディカル・サービス） 総院長。
福岡県生まれ。九州大学医学部卒。専門は神経内科（現地では内科・外科もこなす）。
国内の病院勤務を経て、1984年にパキスタン北西辺境州（現：カイバル・パクトゥン・クワ州）の州都ペシャワールに赴任する。パキスタンのカイバル・パクトゥン・クワ州でハンセン病の診療をはじめアフガニスタン難民や貧困層の診療に携わる。
1989年よりアフガニスタン国内、東部山岳医療過疎地での診療活動を開始する。
2000年に顕在化したアフガニスタンの大旱魃で栄養失調、腸内感染症などが急増したことから、水利事業に着手する。アフガニスタンの農村復興に携わり現在に至る。

JST-RISTEX フューチャー・アース構想の推進事業

「日本が取り組むべき国際的優先テーマの抽出及び研究開発のデザインに関する調査研究」成果報告会
わたしたちがえがく地球の未来(フューチャー・アース)
—持続可能な地球社会へ向けて—

2017年2月4日（土）13:00～16:30

京都市国際交流会館 イベントホール

基調講演：毛利 衛（日本科学未来館館長・宇宙飛行士）

地球温暖化や生物多様性の損失などをそのまま放置すると、わたしたちの経済活動や社会、文化にまで悪影響が及ぶかもしれません。そして、その影響は世代を超えて続く可能性があります。こうした問題を解決するために、市民・行政・産業界・研究者が一緒になって、日本が取り組むべき107の研究課題と10のテーマを選びました。これらの研究課題を題材にして、みなさんと一緒に、持続可能な地球の未来をえがいていきます。



第70回地球研市民セミナー 「高校生とともに考える「環境」について」

2017年2月9日（木）14:00～16:00

地球研講演室

発表：京都府立洛北高等学校 文系2年生の生徒16名

地球研は京都府立洛北高等学校が文部科学省から指定を受け推進している「スーパーサイエンスハイスクール」(SSH)事業に、2013年度から協力しています。今年度は高校2年生、文系の生徒たち16名がレジリエンス、都市、広告、方言、名字、メディア、信仰、マンガと地域振興など、広い意味での「環境」について約半年間かけて研究を行ってきた成果を発表します。

最近のトピックス

近藤康久准教授がクリタ水・環境科学研究優秀賞を受賞

近藤康久准教授が、平成28年度クリタ水・環境科学研究優秀賞を受賞しました。近藤准教授は平成25年度から26年度にかけて、同財団の研究助成を受けて「利水と治水：アラビア半島乾燥地オアシス集落の水環境に関する地考古学的研究」と題する研究を行いました。オマーン内陸部イブリ県の集落遺跡における遺構分布調査と土壌粒度検査を通して、アラビア半島の乾燥地帯における人間の居住と水環境のかかわりを「利水」と「治水」の両面から明らかにしたことが高く評価されました。

菊地直樹准教授が

日本質的心理学会の学会賞 優秀コミュニティ研究論文賞を受賞

菊地直樹准教授が、名古屋市で開催された日本質的心理学会第13回全国大会において、学会賞 優秀コミュニティ研究論文賞を受賞しました。本賞は、質的心理学の分野において、研究の独創性、論文としての完成度、今後の発展性の面で高い評価を受けた論文に授与されるものです。

菊地准教授は、環境社会学をベースとして、兵庫県豊岡市にある「兵庫県立コウノトリの郷公園」の研究者として絶滅危惧種のコウノトリの野生復帰プロジェクトに参画してきました。本論文では地域住民との語りから、人々の鳥に対するかかわりや意味づけと呼称の関係性について明らかにしています。また、著者が研究者と地域住民といった複数の立場を有し、自分の研究に関して他者とのやりとりを通じて自己の研究方法を振り返っています。大都市部から離れた地域社会における数少ない研究者の有り様を記述した点等が貴重であると評価されました。

檜山哲哉 地球研客員教授（名古屋大学宇宙地球環境研究所 教授）が 水文・水資源学会の学術出版賞を受賞

檜山哲哉氏が、地球研和文学術叢書『シベリア—温暖化する極北の水環境と社会』（京都大学学術出版会、2015年）により、水文・水資源学会の学術出版賞を受賞しました。この書籍は、シベリアの自然、社会、文化、温暖化に代表される環境変動とそれに関わる多様な社会問題を、「水循環・水環境」という視点から多角的に解き明かしています。檜山氏の率いた地球研プロジェクトが水文・水資源学における国際共同研究・学際研究の集大成として認められ、同学会が目指す「分野横断・学際研究」の完成形の1つの形態を示したものとして評価されました。



水・エネルギー・食料ネクサスの「ネクサス」とは何でしょう？

えんどう あいこ
遠藤 愛子 准教授 「アジア環太平洋地域の人間環境安全保障—水・エネルギー・食料連環」

プロジェクトリーダー

「ネクサス」とは、「関連、連合、結びつき」、「関連性のあるひと続きのもの（集合体）」という意味です。つまり、水・エネルギー・食料ネクサスとは、「水とエネルギーのつながり」、「水と食料のつながり」とか、「水・エネルギー・食料集合体」と解釈することができます。では、水・エネルギー・食料資源は具体的にどのように関連しているのでしょうか？インドネシアにあるジャティルフル・ダムでは水力発電が行われています。一方、同じダムでは鯉等の魚類養殖が行われており、養殖が原因で水質が悪化し、そのため、電力生産の効率が悪くなるという問題が起こっています。つまり食料生産とエネルギー生産との間に水資源をめぐるトレードオフが存在しているということです。さらに、2050年の世界の水需要量は、農業用水のための水需要が一番多いと予想されている一方で、電力のために使われる水の需要量も増えると見込まれています。食料生産とエネルギー生産との間に水資源をめぐるトレードオフがさらに顕著になると予想されています。そこで地球研ネクサスプロジェクトでは、水・エネルギー・食料資源の関係を解明し、資源間のトレードオフを軽減することを目的に実施しています。



天然ガスを運ぶパイプライン



持続可能な未来に向けた107優先課題

おおにし ゆうこ
大西 有子 研究基盤国際センター 助教

地球環境を守り、持続可能な未来の社会を創るために、何が必要なのでしょうか？市民、自治体、産業界などからの提案をもとに、優先して進められるべき研究課題（アジェンダ）を選び、「日本が取り組むべき戦略的研究アジェンダ」（Japan Strategic Research Agenda）を作成しました。

世界で初めて、大幅に市民の提案を取り入れました。全645件の課題提案のうち、半数以上が市民によるものです。その後ワークショップを開催し、行政、企業、NGO等に所属する社会のエキスパートと、気候、生態、経済、政策等、異なる分野の研究者と一緒に議論し、投票を行い、107の優先研究課題と10の研究テーマを特定しました。この中には、地球温暖化、生態系保全、食料、健康、エネルギーなどの地球規模の問題に加え、地域が抱える社会的課題、文化や価値観、さらに原発事故、風評被害、情報開示など、従来の地球環境研究の枠を超えた課題や日本特有の課題が含まれています。

研究アジェンダは、研究機関や研究資金配分機関が将来の研究を設定する際に利用されます。環境問題解決の重要な担い手である市民の視点を反映することで、持続可能な社会への転換に結びつく研究が増えていくことを期待しています。



ワークショップでの投票の様子



みんなで作る「いただきます」——持続可能な社会の基盤を支える食農システムへの転換を目指して

まっくぐリービー すていーぶん ろばーと
MCGREEVY, Steven Robert 准教授

「持続可能な食の消費と生産を実現するライフワールドの構築—食農体系の転換にむけて (FEAST)」

プロジェクトリーダー

日々の食事は欠かせないものです。しかし残念なことに、私たちに毎日の食事を提供してくれている食農システムは、たくさんの問題——温暖化ガスの排出、過剰な資源消費、水質汚染、土壌流亡などの環境問題や、多様性の喪失、小規模農業の衰退、グローバル化した市場への過度の依存——を抱えています。10 億人が栄養不足を訴える一方で、20 億人が肥満に悩むというかつてない時代のなか、私たちは食料の生産、流通、加工、小売、消費を含むシステムを「転換(transition)」する必要に迫られています。

FEAST プロジェクト (2016 年～2020 年) は、日本、タイ、ブータン、中国の現場で、持続可能な社会の基盤を支える食農システムへの「転換」の試みの実状と可能性を探求しています。国ごと、地域ごとに特有の食料の生産・流通・消費の地図を作ったり、その地域の行政や市民団体、企業と連携して、未来の食卓のビジョンの創出とその実現に向けた活動を始めています。私たちが消費者として今まで当たり前になっていたことを問い直し、食とのつながりを介した「市民」かつ「生産協賛者」として自らを再び位置づける機会を作ることを FEAST プロジェクトは目指しています。



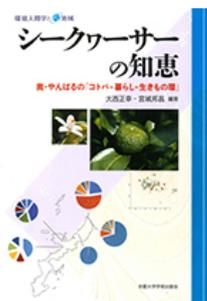
12 月 5 日に秋田県能代市で行った第 17 回地球研地域連携セミナーの参加者

4 出版物その他

地球研学術叢書

地球研和文学術叢書

ニューズレター



そのほか、会場にてご用意いたします。

地球研ホームページ <http://www.chikyu.ac.jp/>

<https://www.facebook.com/RIHN.official> <https://twitter.com/CHIKYUKEN>

懇談会についてのお問い合わせ



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
Research Institute for Humanity and Nature

広報室 遠山・北・木村

TEL: 075-707-2430 (直通) FAX: 075-707-2106 E-mail: kikaku(@)chikyu.ac.jp